



JAPANESE LANGUAGE EDUCATION METHODS

第 61 回 日本語教育方法研究会 オンライン開催 2023 年 9 月 9 日(土)

第 61 回研究会は、オンライン開催といたします。

会長 松崎寛

TABLE 1 第 61 回研究会開催について

日時 :	2023 年 9 月 9 日 (土)
会場 :	オンライン
開催委員 :	内藤真理子 (事務局 : 電気通信大学)、畠山理恵 (同左 : 文化学園大学)

TABLE 2 開催スケジュール

午前		午後	
9:30	全体会 (説明)	12:50	総会
10:00	ラウンド A 開始	13:20	ラウンド C 開始
11:05	ラウンド A 終了	14:25	ラウンド C 終了
11:15	ラウンド B 開始	14:35	ラウンド D 開始
12:20	ラウンド B 終了	15:40	ラウンド D 終了
	昼休み開始	15:50	全体会 (講評) + 交流会
12:50	昼休み終了	16:30	研究会終了

【参加方法】

第 61 回研究会では、運営上の都合により参加者の上限を 160 名といたします。参加するためには参加申込が必要です。参加受付は、まず、会員優先で行います。上限に達しない場合は、非会員からの参加申込も受け付けます。

1) 会員優先受付期間 : 8 月 1 日 ~ 20 日

参加申込フォームのリンクは会員一斉メールでお知らせします。

2) 会員・非会員受付期間 (予定) : 8 月 21 日 ~ 9 月 3 日

実施の有無、参加申込フォームのリンクは研究会ウェブサイトでお知らせします。

なお、今回の研究会は、参加申込をしていない方は (会員・非会員いずれも) 参加できませんのでご注意ください。

【プログラム】

発表課題の前の番号は、ラウンドごとの番号で、括弧内は全体の通し番号です。例えば「C01(32)」は、ラウンド C における発表番号は 01 で、全体の通し番号は 32 という意味です。研究会誌にはこの括弧内の通し番号の順番で掲載されています。なお、今回の研究会で口頭発表は行いません。

【午前の部】

●ラウンド A 10:00-11:05 (発表件数 17 件)

A01(1).日本語における慣用語について

張彤 (大連科技学院)

日本語の慣用語は、一定の文法関係を持つ 2 つ以上の単語を固定した形で組み合わせ、全体として特定の概念を表現したものである。それらは、表現形式が鮮やかで生き生きとしているだけでなく、日本人の考え方や文化的特質、生きる喜びを映し出した貴重な文化遺産である。日本語の慣用語の多くは、文字通りの意味とは大きく異なるため、学習者は、慣用語を覚える過程で個々の慣用語を誤訳したり、誤用したりすることがある。また日本語の慣用句とことわざ、熟語を混同してしまうこともある。

本稿では、日本語の慣用語の定義と分類、慣用語とことわざ、熟語の違いを中心に、日本語の慣用語の特徴、翻訳方法について考察していこうと思う。

A02(2).授受表現の理解における格情報省略の影響に関する考察—中上級中国人日本語学習者を対象に—

陳詩宇 (横浜国立大学大学院修了生)

授受表現は中国人日本語学習者にとって難題の一つである。その原因の一つは、学習者が動作主を弁別しにくいことにあると考えられる。そこで、本研究は、日本語の授受表現の主格と与格という格情報の省略が学習者の理解にどのような影響を与えるかを考察した。中級と上級の中国人学習者を対象として、アンケート調査を実施した。調査項目として、格情報なしと格情報ありの授受表現文を設置し、動作主を指摘してもらうことで、学習者の理解程度を調査した。その結果、授受表現の文型構造の複雑さと格情報の順序により、格情報の省略の影響が異なることが明らかになった。

A03(3).オンラインツール“Microsoft OneNote”を用いた自己紹介に関する一考察—中上級日本語学習者を対象にしたアンケート調査を通じて—

佐古恵里香 (流通科学大学)

本稿は、対面授業におけるオンラインツールの活用を提案することを目的としている。まずは、中級から上級レベルの日本語学習者 29 名を対象に、Microsoft OneNote を用いた対面授業を行った。次に、アンケート (10 問) を作成し、学習者に 6 段階評価を求めた。その結果、ほとんどの質問項目において、平均値が 5 前後であったことから、学習者は OneNote の機能にほぼ満足していることがわかった。但し、イマーシブリーダー (音声読み上げ機能) と画像挿入機能の評価には有意差 (p 値: 0.02) が見られた。結論として、オンラインツールを用いて、授業で、画像などの視覚情報を共有することは、学習者の理解を促し、言語情報で足りない部分を補完できると指摘した。

A04(4).文章教材の作成に生成 AI を活用する試み—語彙学習の効果を高める文章を読む練習—

久野かおる・波村慎太郎・津坂朋宏（東京福祉大学）

東京福祉大学名古屋キャンパス留学生日本語別科では、学習者が効果的・効率的に文型や語彙の使い方を身につけるために、科目間の連携を図り、入学当初から 200 字程度の文章を読む練習を続けてきた。この取り組みは、文章に○×式、四択式の問題を付すことにより、学習者が楽しみながら主体的に文章を読むことができていると感じている。

これまで「表記」の授業では漢字と語彙を扱いつつ、学習効果を高めるために文章を読む練習も取り入れたいと考えていたのだが、文章の作成には至っていなかった。

そこで、本稿では、当別科の語彙を扱った授業につき、提示した学習語彙を使用した文章教材の作成に生成 AI を活用する試みを報告する。

A05 (5).日本語教師の省察に関する研究では何が示されてきたか —『日本語教育方法研究会誌』第 1 巻から第 28 巻を対象として—

細井駿吾（クアラルンプール大学）・末松大貴（名古屋大学大学院生）

本研究は、日本語教師の省察を対象とした先行研究の整理を試みたものである。調査対象は、研究会誌『日本語教育方法研究会誌』の第 1 巻 1 号から第 28 巻 2 号とした。結果、日本語教師の省察を対象とした研究は計 6 本見られた。そして、それらを「【誰が】【なぜ】【何を】【どのように】省察したのか」という観点からまとめた。その結果、様々な省察の報告が見られたが、特に、複数名の教師で行った省察の報告が目立った。一方で、省察を行った背景や目的が十分に示されていない研究も複数見られた。このことから、筆者らは、教師の省察を対象とした研究では「【なぜ】省察を行ったのか」という点を示すことも重要ではないかという点を述べる。

A06(6).Kahoot!を使った名詞アクセントの聞き分け練習の試み

山本栄作（元横浜国立大学大学院生）

日本語学校でのアクセント聞き取り練習で、教師側からの問いかけに反応する学習者が一部に偏ってしまい、学習者の理解度の把握が難しいことが多かった。今回、Kahoot!を用いて、2つの名詞のモデル音声を聞かせ、そのアクセント型が同一かどうかの二者択一問題を実施した。学習者の積極性が大きく上昇したのが見て取れ、教師としても問題毎に解答状況を見ながらフィードバックを行ったり、練習後に学習者別のデータ確認を行うのに有効だった。また、聞き取りにおいて平板型の正答率が高いという先行研究の知見と合致した結果も得られた。Kahoot!は色々なメリットのある有効なツールだと感じた。

A07(7).JSL 児童における第二言語習得遅延と学習意欲の検討

王睿琪（東京外国語大学）

本研究の目的は、散在地域における日本語を第二言語として学ぶ JSL (Japan as a Second Language) 児童に焦点を当て、特に第二言語習得が遅延している JSL 児童を対象に、その学習意欲から見た遅延の原因を考察することである。その結果、日本語指導が進行するにつれて学習意欲が減退していく傾向が確認された。具体的には、指導開始時には学習意欲が最も高まり、50 音指導終了時点で特に「学習効力感」が急激に低下し、指導終了時にはほぼ喪失していることが明らかになった。学習意欲低下の要因としては、自律学習の習慣

が身につけていないこと、放課後の学習支援が不足していること、および母語の動画を長時間視聴していることが挙げられる。

A08(8).中国人上級日本語学習者における語彙的複合動詞の理解状況 —誤訳分析の観点から—

王夢晗（北京外国語大学大学院生）

本研究は中国人上級日本語学習者を対象に、VV型、Vs型、pV型、V（一語化）型という4種類の語彙的複合動詞の理解状況について、単語翻訳テストを用いて、誤訳分析の観点から検討した。その結果、学習者は語彙的複合動詞を理解する際、単純動詞から影響を受けることが示された。そして、単純動詞の意味による誤訳を「V1の意味による誤訳」、「V2の意味による誤訳」、「V1+V2の意味による誤訳」に分類し、語彙的複合動詞の種類別に検討した結果、1) VV型とVs型では、「V1の意味による誤訳」が最も多いこと、2) pV型とV（一語化）型では、「V2の意味による誤訳」が最も多いことが明らかとなった。

A09(9).インプットからインテイクへ、学習者は何をインプットされるべきか

高柳真理（城西国際大学）

初級レベルであってもコミュニケーション力を伸ばす学習が必要である。しかし、文法に重点を置いた文法積み上げ式教科書では、語用論的要素を欠いたまま学習が続けられる可能性もある。ここでは、2つの違う教科書を使用した学習者自身が答えた学習内容理解度を「場面理解」「発話意図」「人間関係」の3点で比較した。その結果、語用論的要素のインプットがある教科書の方が高い理解度を示した。また、文法積み上げ式教科書で教えている教員に対して、どのようなインプットをしてから学習活動をするかも問うた結果、教授歴の長い教員は、語用論的要素を自らインプットする傾向が高いことが分かった。コミュニケーション能力を高めるインプットの在り方を考察した。

A10(10).JSL 高校生のための「国語学習活動 Can-do」活用の可能性 —日本語指導担当者への聞き取り調査を踏まえて—

飯島博子・斎藤里美・浜田かおり（東京外国語大学）

本稿では、まずJSL 高校生の国語科と日本語の学習支援のために開発した「国語学習 Can-do」を用いた自己評価の実施方法と生徒への返却方法について報告した。次に、生徒の自己評価の結果を学習指導へ活用するために、生徒の取り出し授業を担当する日本語支援員にインタビューを行った。インタビューの結果、自己評価の結果を技能別に集計したものが生徒との個人面談の資料として活用できることがわかった。自己評価の結果を効果的に活用するためには、実施する場合も返却する場合も指導者と生徒が対面で行う必要があることも明らかになった。生徒指導や国語科を担当する高校教員との共有方法と効果的な活用のあり方については今後も検討が必要である。

A11(11).スピーチ／プレゼンテーションの練習時の日本語力を可視化する実践 —Microsoft Teams の「音読の練習」の個人化と学習者からのフィードバック—

加藤伸彦（京都外国語大学）

本稿は、話すクラスで実施した Microsoft Teams の「音読の練習」の個人化の実践過程と結果、学習者のフィードバックを報告するものである。本稿でいう個人化とは、それぞれの学習者が書いたスピーチ、またはプレゼンテーション用の原稿を読む練習を、「音読の練習」から各個人に割り当て、個人ごとの日本語力

を可視化することである。実施過程では、授業前に各受講者に課題を割り当てる方法と、授業中に課題を実施する方法を述べた。学習者のフィードバックは授業についての5段階評価とコメントからなる。「音読の練習」の結果と学習者のフィードバックから、学習者に発音の進歩が見られ、学習者自身もそれを感じていること、および今後の「音読の練習」を使ったよりよい実践に向けた改善点が示唆された。

A12(12).地方の日本語学習支援団体における新規人材確保の現状と課題

高橋志野・向井留実子（愛媛大学）

本研究は、地方における日本語学習支援団体の今後の存続に必要な、新規人材確保のあり方を考察したものである。E県を対象として、日本語学習支援団体への新規人材確保の方法や研修会・勉強会の実施の有無を調査したところ、新規人材確保の核となる養成講座を行っていない団体が多く、実施している養成講座も活動現場の見学の機会に限られるなど、活動に直結する内容が不足していることが明らかになった。団体の活動の場にまで至る新規人材を確保するためには、一団体の努力では難しく、団体間の関係構築のために、県全体を俯瞰できる存在が重要で、その存在を中心に各団体が協力しながら課題に取り組む必要があることが示唆された。

A13(13).外国人介護技能実習生の日本語学習—就労施設外での継続的な学習に着目して—

山元庸子（九州大学大学院生）

本研究は、介護技能実習生の就労施設外での日本語学習に着目したものである。技能実習生には、就労開始後に日本での生活や就労を支えるための日本語教育のカリキュラムは存在せず、実習生自身が日本語学習を管理する必要がある。調査対象者に対して、半構造化インタビューを2回行い、就労施設外での日本語学習の現状を明らかにし、継続的な日本語学習支援の方法を検討する。就労施設外では、個別学習と協働学習が行われていた。また2回のインタビューの間に継続されていない日本語学習も存在した。これらにより、日本語学習の継続支援について、介護技能実習生への周囲からの理解や日本語学習支援の体制作りが必要であると考えた。

A14(14).大学留学生の口頭発表能力育成のための動画教材開発と授業実践 —「よい発表」の意識化を促す—

清水美帆・平田好・有田佳代子（帝京大学）

口頭発表やプレゼンテーション能力の育成が留学生教育でも行われているが、発表者らの勤務校における質問紙調査では、口頭発表の「難しさ」について「日本語の正しさ」を課題とした回答が多く、その他の評価要素（話し方や態度など）に着目できていない様子が明らかになった。そこで、初年次留学生らに口頭発表に係る総合的な能力を意識化させるため、先輩留学生による「発表動画」を制作し、授業実践した。視聴前後の記述を比較した結果、視聴後に新たな項目に気づいており、活用の可能性が確認できた。一方で、発表能力を総合的に認識できたとまでは言えず、活用方法の検討や追跡調査が必要であることがわかった。

A15(15).翻訳活動による「日本語を書く力」と「言語を見る力」の養成

白鳥文子（京都外国語大学）

本研究では、翻訳活動が日本語上級学習者の書記能力向上と対照言語学的視点を育てる一助になり得ることを述べる。TILTは、外国語教育での「翻訳」の活用の中で、Cook（2010）は、訳す行為は言語意識と言語使用を促し、言語教育において価値があると主張している。

日本国内の日本語教育機関で学習者の母語が異なる場合、特に英語以外の言語に訳出することは活動として困難なことが多い。そこで、今回、学習者の母語で書かれた本を、洗練された日本語として訳すことに焦点を当て、活動を行った。また、翻訳するだけでなく、翻訳の過程で得た母語と日本語の違いに関する気づきを発表した。それによって、書記能力向上とともに、母語と日本語を対照的に見る視点を養う一助とすることができた。

A16(16).プレゼンテーションクラスにおける質問作成能力育成の試み — 「質問分類表」を活用して—
長谷川由香（慶應義塾大学）

本研究では、上級プレゼンテーションの授業において、質問作成を容易にするために「質問分類表」を導入した活動を紹介する。活動の目的は、質問作成に必要な質問形式を学習者に身につけさせること、また、質問を作ることで学習者がより深く学習内容を理解・思考し批判的能力を高めることである。学習者が的確に質問を作成する能力を検証し、作成した質問とアンケート回答から学習者の質問作成に対する意識を分析した。その結果、学習者にとって質問作成が特に困難であった質問カテゴリーは、「詳細説明」「反論」といったカテゴリーであった。また、「質問分類表」を授業に活用する際には、学習者が質問意図を理解できるようさらなる工夫が必要である。

A17(17).日本語教員養成課程で学ぶ「書きことばの指導」に関する授業開発
鎌田美千子（東京大学）

日本語の書きことばの指導は、日本語教員養成課程の大学生が難しさを感じる項目の一つであることが先行研究において指摘されている。本研究では、この問題の解決に向けて、大学の日本語教員養成課程の1・2年次科目の一部として、書きことばの指導に焦点を当てた授業開発を行った。

本授業は、(1)「書きことばの指導」の必要性への気づき、(2)日本語教科書に示されている学習例の理解、(3)日本語習得上の困難点の理解、(4)話しことばと書きことばの違いを示すための例文作りの4段階から構成される。授業後アンケートでは、概ね高い評価が得られ、日本語教員養成課程の大学生が感じる難しさを軽減することができたと考えられる。

●ラウンド B 11:15-12:20（発表件数 14 件）

B01(18).日本語専攻大学生の発話ストラテジーの使用に及ぼす L2 グリットの影響—認知的柔軟性による調整効果—

宋啓超（広島大学大学院生）

本研究は、中国人日本語学習者が L2 の日本語で発話する際のストラテジーの使用に及ぼす L2 グリットの影響および影響の仕方が学習者の認知的柔軟性と L2 の習熟度によっていかに異なるかについて検討した。その結果、(1) 習熟度によって、学習者のストラテジーの使用に有意な変化がなかったこと；(2) L2 グリットは学習者の発話ストラテジーの使用に有意に影響すること；(3) 習熟度が上がるにつれ、認知的柔軟性と L2 グリットの関係は補完関係から相乗関係へと変化していくことの3点が示唆された。本研究の結果に基づき、教師は学生の外国語学習への弛まぬ努力を強化することによって、学生の日本語でのコミュニケーションストラテジーの使用への促進効果が期待できると言える。

B02(19).中等教育と高等教育の日本語教育における教育内容の違い —中国 H 省 K 学院の日本語生の苦手項目変容への影響から考察—

彭璽閣（漢口学院）

本稿は中国の H 省 K 学院の日本語生(日本語を外国語科目として受験し、入学した学生)を対象に、中等教育と高等教育の日本語教育における教育内容の違いと日本語生の苦手項目変容への影響を検討した。調査から、高等教育では、聴解と文法は中等教育と同じ主な教授内容とされ、会話は主な内容となり、作文は主な内容から外れたとわかった。変化があるにも関わらず、この 4 つの能力はずっと学生の苦手な部分で、改善されていない。そこから、各能力養成の時間分配、内容調整を見直す必要があるだろう。また、学生の学習意欲、他の公共外国語の授業からの参考、学校側からの協力が不可欠と考えられる。

B03(20).「いい人そうだ」の用法と使用場面に関するコーパス調査 —日本語授業での導入に向けて—

宮口徹也（岡山理科大学）

「いい人そうだ」は直感として「いい人のように思われる」という意味で用いられる口語表現で、名詞「いい人」に様態の「そうだ」がついたものである。同表現は母語話者にはよく使われる一方、「そうだ」は一般に名詞につかないとされるためか日本語教材では記述が一切見られないのが現状である。本稿では、教室での導入に向けて、同表現がどのような用法・場面で使われるのか把握するため、『NINJAL-LWP for TWC』を用いて用例の調査を行った。その結果、「いい人そうだ」は、その場にはいない特定の人物を対象として話者の評価を述べる際に用いられる傾向があることがわかった。そこで、教室での導入における場面設定としては、二人の会話の中で第三者に言及するような場面が適当ではないかと考えられる。

B04(21).三題噺を応用した紙芝居制作プロジェクト活動 —文章構成力と表現力の養成を目指して—

森岡千廣（京都先端科学大学）・小西彩美（元大阪みなみ日本語学校）・川西菜緒（元大阪みなみ日本語学校）

三題噺とは、ランダムな 3 つの単語から即興で話を作り上げる落語パフォーマンスの一つである。筆者らは、この三題噺を日本語授業に応用すれば、学生の文章構成力の養成に繋がるのではないかと考え、日本語学校において学生が 3 つのお題を使って物語を考え、それを紙芝居の形式で発表する『紙芝居制作プロジェクト』を行った。紙芝居発表では登場人物になりきった音読や聞き手を引き込む語りが必要であるため、学生の表現力の伸長も見込んだ。その結果、紙芝居制作中の様子や学生の発表から、学生は物語作文における文章構成に対する視点が身につく、表現力としても成長を見せた。

B05(22).地域日本語活動における多感覚楽修の実践

横山りえこ（早稲田大学大学院生）

本稿は、筆者が地域の日本語活動として行った多感覚楽修の実践と、それに関する学習者インタビューを一部報告するものである。多感覚楽修とは学びの多様性を尊重し、学習者が複数の感覚を使い、楽しみながら日本語にふれることのできる日本語活動を指す。これは、得意な感覚を活用し各自に応じた柔軟な学び方ができる等、誰もがその人らしく学ぶための教育のユニバーサルデザインとも親和性があると考えられる。そのため障害や個人的特性のある者、高齢者、そして育児中の者等を含む多くの学習者にとっても参加しやすい日本語活動となることが期待できる。今後は、多感覚楽修の有用性についてさらに分析を進め、地域の日本語活動として提案できるか検討したい。

B06(23).ショート動画作成プロジェクト「教えて！ふむふむ先生」 ―国際交流課外活動を継続的に行う仕組み―

上原真知子（恵泉女学園大学）・佐藤愛奈（恵泉女学園大学大学院生）・秋元美晴（恵泉女学園大学）

本稿では、恵泉女学園大学で継続的に行われている課外の国際交流活動であるショート動画作成にいたる経緯、活動内容とその特徴を紹介する。そして、継続が難しいと言われている課外国際交流活動が成功している要因を、活動の特徴とアンケート調査の結果から探る。その結果、大きな要因は次の4つであることがわかった。①国籍、学部、学年、日本語能力、立場に関係なく多様性を受け入れる場であること。②参加しやすく、多くの人とコミュニケーションがとれること。③各自何らかの役割があることにより、自分の可能性が上げられること。④学生も留学生も教職員も水平な関係であるため、尊重しあえる仲間として活動することができること。

B07(24).日本留学試験（EJU）分析の試み

前野文康（K I J 語学院東京校）

本稿では、日本留学試験（EJU）をテキストマイニングによる分析を試みた。2022年度第2回のEJUを対象に、「読解」、「聴読解」、「聴解」のテキストデータを入力し、分析した。分析結果から、全体的な特徴と科目間の比較が明らかになった。頻出語リストでは、「考える」「自分」「人」などが上位に現れ、共起ネットワークでは「環境」の語が中心性の高い語として示された。科目間の比較では、「読解」が社会的な問題を扱っており、「聴解」では和語が多く使用され、「聴読解」では生物名や「期待値」などの他科目とは異なる語が出現していることが示された。今後は複数年度のデータを含めた分析が必要である。

B08(25).外国ルーツの児童生徒への日本語指導と大学での国際交流経験の関係 ―若手教員へのアンケートから―

松原さくら・北野朋子（関西大学）

日本の学校教育現場では、日本語教育に関する経験のない教員が指導を担当することがある。特に若手教員が、教育現場での経験も浅いながらに日本語指導も任されるケースには多くの課題が見られることから、本研究では若手教員を対象にアンケート調査を行った。その結果、「教員になってからの日本語指導に役に立った」と思う大学時代の課外活動について明らかになり、大学時代の国際交流経験や日本語に関するボランティアが日本語指導に対する難しさや抵抗感を持ちにくくすることが示唆された。これにより、教員志望の学生に対して、国際交流や日本語に関するボランティアを大学として推進していくことの必要性について言及している。

B09(26).学部留学生を対象とした文語文教育―導入教材としての「イソップ寓話」の可能性―

佐々木幸喜（京都大学）

本稿では、学部留学生を対象とした文語文の授業実践を報告する。学習者への聞き取り、学部専門科目の教科書分析から、大学において、明治期の文語文（近代文語文）を理解していることが、大学院生にかぎらず、学部生にも求められていることがわかった。そこで、1・2年次の日本語上級学習者を対象とした読解授業に、近代文語文を扱う時間を設けることとした。導入教材には明治期の「イソップ寓話」を用いた。文

語文法が未習の学習者であっても、感覚的に文語文を捉えられると考えたためである。実践において、文法、仮名遣い、踊り字はもちろん、漢字の字体の違いにも意識を向ける学習者がいたことが観察できた。

B10(27).管理運営業務の29分類で見る職場の異動に伴う管理運営業務の変化

古川嘉子（帝京大学）・中川健司（横浜国立大学）

日本語教師のキャリアは一時的な離職や他業種への移動も含む「非直線型キャリア」であると考えられる。著者ら2名は各自の日本語教師としての3つの異なる職場経験について、管理運営業務の29分類を利用し、各職場の管理運営業務の特徴を振り返った。職場によって変化が大きかった項目は、29分類の予算関連業務、広報、さらに、新たに加えた機関内連絡調整であった。職場の異動による掌握業務の範囲の拡大などにより、管理運営業務の変化が見て取れた。このような変化は、文化審議会国語分科会（2019）の示す日本語教師の業務の段階ごとの資質・能力の違いとも関連し、管理運営業務を資質・能力の面で検討していく可能性も示唆された。

B11(28).秋田市における技能実習生支援の在り方とは―地域日本語教育関係者と受入れ企業との「技能実習生の日本語支援を考える会」より―

平田友香（国際教養大学）・古田梨乃（新潟大学）

近年、秋田県の外国人労働者数が増加傾向にあり筆者らが関わっている地域日本語教室、秋田市日本語教室においても技能実習生の受講者が増加している。2021年には、当教室の学習者を対象にアンケート調査を行ったが、今回は市内の技能実習生のみを対象に2022年6月にニーズ調査を行った。その結果、現在の教室で行われている活動と技能実習生のニーズに相違があること等がわかった。2023年5月、この調査結果を技能実習生受入れ企業、市職員、日本語支援者等で「技能実習生の日本語支援を考える会」を実施した。会では様々な立場からの現状の課題、日本語や日本語以外の支援方法について具体的に検討することができた。本発表では話し合われた内容を報告し、技能実習生の日本語学習支援の在り方について考察する。

B12(29).日本語と漫画の融合型新専攻における学習動機づけ―北京第二外国語大学における調査から―

孫按蕾・菅田陽平（北京第二外国語大学）

本研究は、2019年に中国・北京第二外国語大学に設置された「日本語漫画文化創意コース」で学ぶ102名の学部生を対象に、日本語学習の動機づけ調査を行い、分析を加えたものである。このコースにおいては、日本語と漫画学・クリエイティブデザインを融合させた内容を「日本語専攻」教育のカリキュラムに取り入れる試みが実施されている。因子分析の結果、「Ⅰ、異文化への興味」、「Ⅱ、漫画を中心とする日本文化」、「Ⅲ、出国」、「Ⅳ、授業・試験」、「Ⅴ、受動」、「Ⅵ、日本語の可能性・学びやすさ」、「Ⅶ、日本語母語話者とのコミュニケーションへの期待」という合計7つの因子が抽出された。

B13(30).アンケートおよびインタビュー調査からみた日本語ボランティアの変化

田川恭識（日本大学）

日本大学日本語講座（JLP）では、交換留学生を対象に日本語教育を行っている。JLPの特徴は、日本大学の学生がボランティアとして授業や各種イベントに参加する点にある。JLPの活動にボランティアが参加することに対し、留学生からは非常に肯定的な反応が寄せられる。一方、ボランティア側からも「参加して良かった」という感想が多く寄せられる。活動を通して変容や成長していく様子が見てとれるが、具体的には

ボランティアがどのような学びを得ているのか、明らかにされてこなかった。そこで本研究では、「社会人基礎力」を指標としたアンケート調査を学期開始時と学期終了時に実施した。その結果、顕著な変化が見られたボランティアの存在が明らかになった。その後、顕著な伸びが見られたボランティアを対象にインタビュー調査を行った。

B14(31).交換留学生の社会ネットワークと日本語使用の変化に関する考察

半沢千絵美（横浜国立大学）

本研究は、留学生の人間関係を「社会ネットワーク（Social Network）」と捉え、交換留学生の社会ネットワークと日本語使用の変化を分析し、それらの関係性を考察することを目的としている。本発表で報告するのは、留学中の日本での社会ネットワークの構築という観点からは対照的な結果を示した2名の交換留学生のケースについてである。日本での友人関係の広がりを見せた留学生と、そのような新たな友人関係を作ることができず母国の友人ネットワークを維持した留学生では、日本語使用の機会の頻度や質が異なることが示された。日本語でのコミュニケーション機会を望んでいる留学生に対しては、ネットワーク作りを視野に入れた支援が必要ではないだろうか。

【午後の部】

●ラウンドC 13:20-14:25（発表件数14件）

C01(32).共同研究者の見つけ方 —共同研究に至った経緯の分類—

中川健司（横浜国立大学）

共同研究には、個人研究ではまかなうことができない①専門性、②多様な視点、③ネットワークの3つを補うことができるというメリットがある。しかし、共同研究を行うためには、その研究を遂行するために適当な資質を有する共同研究者を見つけなければならない。本発表は、発表者がこれまでに日本語教育方法研究会（JLEM）で行ってきた17回の共同発表について、共同研究者とつながった経緯を、①同僚、②学会参加、③直接コンタクト、④プログラム、⑤学会運営、⑥紹介の6つのネットワークから概観しどのような形で共同発表に至ったかを述べるものである。

C02(33).中国人上級日本語学習者による「ほめ」への返答に関して—接触場面の「ほめ」の自然談話をもとに—

張晨（広島大学大学院生）

「ほめ」はほめる側からの好意に基づく肯定的な評価である。そのため、ほめられる側はそのまま受け入れることが好ましいが、尊大な印象を与える可能性があるため、葛藤状態が生じることがある。特に接触場面において、中国人日本語学習者にとって、その葛藤状態から抜け出すことは困難だと予想される。本稿では、日中接触場面における「ほめ」に関する自然談話を分析した。その結果、中国人上級日本語学習者が「ほめ」への返答において、「回避」>「肯定」>「否定」という日本語母語話者と共通する傾向があることが示された。ここから、中国人上級日本語学習者は、「ほめられたら謙遜する」というステレオタイプの返答パターンに陥っていない可能性が示唆される。

C03(34).ChatGPT による作文のフィードバックとその活用の試み

寺嶋弘道（立命館アジア太平洋大学）・稲田栄一（関西学院大学）・板井芳江（立命館アジア太平洋大学）・隈井正三（立命館アジア太平洋大学）

2022年11月に公開された ChatGPT は、今後の言語教育・言語学習においてさらに身近なツールとなる可能性がある。本研究では、そうした現状を踏まえ、学習者が作文のフィードバックとして ChatGPT を用いる場合、どのようなプロンプトが適切かを調査し、そのプロンプトによって得た ChatGPT からのフィードバックの活用について考察した。調査の結果、修正後の作文には、ChatGPT のフィードバックに基づいた修正と基づかない修正・修正なしの部分があり、自身で判断し、フィードバックを活用するケースが見られた。一方、ChatGPT には、不適切なフィードバックや不十分なフィードバックがあり、それにより誤用を生むケースも見られた。

C04(35).JSL 高校生の教科学習語彙選別と語彙リストの活用方法を考えて —地理総合教科書と教科担当教員による授業プリント語彙を比較して—

斎藤里美（東京外国語大学）

JSL 高校生は、初級レベルの生徒も入学してすぐに、中級以上の日本語で、教科の学習をしなければならない。翻訳アプリなどの普及から自律学習と自助努力の必要も言われているが、そのみでは脱落する生徒に対応できない。JSL 生徒に対応している教員の負担も減らす必要がある。そのため、語彙の面から教科学習の難しさを改めてとらえ直した。そのうえで、効率よく教科学習をするための語彙選択方法を検討した。本研究では、授業プリントの語彙を活用することで、教科担当教員の意図を取り入れようとした。さらに、取り出した語を利用する方法として Teams で問題を配信することとし、その改善の過程を一案として示した。

C05(36).初中級日本語学習者の聴解におけるノートテイキングストラテジー

左雲萌夏（チェンマイ大学）・北野朋子（関西大学）

本調査はタイ国内の日本語学科の大学生のノートテイキングストラテジーを分析したものである。分析対象としては CD を 2 回聞きメモを取ったものと、その後学生同士での内容確認で新たにわかったことをメモしたものの計 3 回分である。また、メモの言語は制約していない。その結果、学習者は目標言語である日本語を主に用いつつ、母語であるタイ語も使用しながらノートテイキングを行っていることがわかった。さらに、英語や記号、イラストなどを用い、工夫しながらノートテイキングを行っていることがわかった。今後はノートテイキングの内容と理解度の関係について分析を行いたい。

C06(37).自律性の向上を目指した日本語教師養成に関する考察 —地域日本語・日本文化教室実施の試みを中心に—

チャン ティ ガン（東京外国語大学大学院生）

本研究では、ベトナムにおいて初・中等教育機関で日本語教師を目指す高等教育機関の学生が、日本語教師養成課程の一環として「自律性」を向上させるために筆者が学習空間である「地域日本語・日本文化教室」活動を作成し、それに参加した 7 名のベトナム人学生を分析対象として、インタビュー調査を実施し、質的研究を行った。その結果、ベトナム人学生意識変容のプロセスを分析し、自律性がどのように向上するかを明らかにしてきた。また、それに関わっている要因にはどんなものがあるか考察を行った。分析や考察

結果をもとに、今後、ベトナムにおける日本語教師養成課程の質的向上のために、どのような取り組みが必要なのかを表す教育的な示唆として、自律性の向上を目指す日本語教師養成過程のモデルケースを提案することができた。

C07(38).アニメを授業に取り入れることに関する日本語教師の考え —台湾人教師 A のインタビューから—
龔柏榮（東呉大学）・細井駿吾（クアラルンプール大学）

世界各地で、日本のアニメ等のポップカルチャーの人気は高く、日本語教育においてもアニメに関する研究やアニメを授業に取り入れた実践がなされているが、肯定的な意見や否定的な意見など様々な意見がある。そこで本稿では、アニメを取り入れた授業について、どのように考えているか探るため、台湾の高等教育機関に勤める台湾人日本語教師にインタビューを実施した。その結果、教師 A 自身がアニメを取り入れた授業を経験したこと、学生や他の教師とのやり取り、学生の関心の変化を感じたこと、高度な日本語人材の育成という目標があること、アニメを授業に取り入れることの難しさを感じていることがインタビューを通して具体的に明らかになった。

C08(39).日本語教育版ケースメソッドにおけるケース教材のあり方 —より深いディスカッションのために—
アドゥアヨムアヘゴ希佳子（宝塚大学）・鈴木綾乃（横浜市立大学）

本研究の目的は、日本語教育版ケースメソッド開発の一環として、ケース教材のあり方を考察することである。発表者が執筆したケース教材の第一稿と第二稿を比較し、加筆箇所を抽出するとともに、検討会議の文字化資料の中から、加筆箇所に関連する部分を抽出し、加筆の理由を分析した。加筆したのは、会社の情報、主人公の情報、別の問題場面、同僚の情報という4点についてであった。加筆の理由は、1) 教育目的に直接関連しない周辺情報も入れて現実場面同様に多面的に考えさせるため、2) 情報不足によるディスカッション参加者の不必要な想像や誤解を避け、ディスカッションの論点の拡散を防ぐため、という2点であった。問題場面を取り巻く情報の記述が重要だといえる。

C09(40).初中級日本語教材におけるモデル会話の特徴分析—AIを用いた新たな日本語教材の開発に向けて—
孫彤（東京外国語大学大学院生）

本稿では、初中級学習者向けのコミュニケーション能力の向上を目的としている日本語教材5種類を取り上げ、教材のシラバスとモデル会話の特徴を分析することによって、日本語会話教育が注目していることを明らかにする。そのうえで、AIを用いた新たな日本語教材の構築について提案したい。分析の結果から、話題シラバスを採用している教材が多くなったことが推測される。また、会話は「開始部—主要部—終了部」の流れに沿って展開することが一般的であることが明らかになった。今後は、話題を指定でき、「開始部—主要部—終了部」に沿って会話を展開でき、会話ストラテジーを練習できる会話練習相手としてのAI教材の開発を行う。

C10(41).呈示モダリティが学習者の復唱成績に与える影響 —試行回数とワーキングメモリ容量を操作した実験的検討—

李佳洋（広島大学大学院生）

本研究は上級日本語学習者を対象とし、復唱過程における呈示モダリティ、試行回数と学習者のワーキングメモリ容量が、学習者の復唱の正再生率に与える影響を調べた。実験では、学習者に聴覚呈示と視覚呈示

の日本語文を分散的に3回復唱させ、各試行回数における学習者の正再生率を分析した。その結果(1)復唱の正再生率において、ワーキングメモリ容量の小さい学習者は容量の大きい学習者と比べ、呈示モダリティからの影響を受けやすいこと、(2)試行数の増加とともに、学習者の復唱の正再生率が高くなること、(3)視覚呈示条件は聴覚呈示条件と比べ、正再生率が高いこと、の3点がわかった。

C11(42).日本語学習における図書推薦競技に関する一考察—推薦本と聴衆によるコメントの分析—

小池直子(北京理工大学)

本稿は、中国の大学の日本語作文の授業に所謂「ビブリオバトル」に倣った図書推薦競技を導入した実践報告である。推薦者の日本語能力やこれまでの成績が投票に影響しないよう、筆者は、匿名発表および教師による原稿の代読という「ビブリオバトル」とは異なるルールを採用した。しかし実際は、推薦者が聴衆の知的好奇心を満足させる本を選択できれば、聴衆は推薦者の日本語能力にとらわれることなく投票先を決めることがわかった。また、この種の図書競技を開催するにあたっては、教員が図書に制限を設けず、学生が自由に図書を選択できるようにした方が、スピーチ原稿作成への積極性や多角的な批評眼の生成など、学生の日本語能力の向上に有益であると思われる。

C12(43).オンライン会話セッション「みんなのひろば」活動集作成の報告

出蔵咲野(仙台国際日本語学校)・岸野彩花(東北大学大学院生)・島崎薫(東北大学)

コロナ禍をきっかけに、日本語を学ぶ人や日本語を使って話したい人を広く集めてオンラインでおしゃべりする「みんなのひろば」を始めた。「みんなのひろば」は、教える側/教わる側という区別なく、参加者が対等に関わり互いを知る出会いの場になることを目指した。3年間の活動をまとめた活動集は「活動の流れ」「トピックトーク」「ゲーム」の3部構成で、さまざまなおしゃべりのトピックやゲームを収録している。また、活動集を手にとった方がそれぞれの実践の場に合わせて使えるようなアイデアも多数紹介している。活動集を多くの方に活用していただき、実践で得た気づきや課題を共有し合うことによって、「みんなのひろば」という場をよりよいものにしていければと考えている。

C13(44).ベトナム人EPA候補者のベトナム現地で学んだ日本語教育の捉え方

渡邊幸子(所属なし)

本研究の目的は、ベトナム人EPA候補者のJLPT N3取得に向けた学習が、職場環境においてどの程度役立っていると感じているか、また、不足点があればどのような点かを明らかにすることである。そのため、来日1年未満のベトナム人EPA候補者を対象に質問紙調査を行い、そのデータを基に相関分析を行った。

その結果、JLPT取得に向けた学習は役に立っているが、看護日誌や介護日誌の読み書き、仕事上のスタッフ間コミュニケーションなど、いくつかの点において困難さや不足点を感じていることが判明した。JLPT N3取得に向けた学習だけでなく、職場環境でのコミュニケーションを見据えた総合的な底上げを必要としていることがわかった。

C14(45).江蘇大学におけるCATツールを用いた日中翻訳授業のケーススタディ

劉琳(江蘇大学)

本研究では、中国の江蘇大学における日中翻訳授業でのコンピュータ支援翻訳(CAT)ツール「YiCAT、雲訳客」の導入とその効果について考察を行った。日本語学部の3年生の32人を対象に、CATツ

ールの使用方法を教え、実際の翻訳作業への応用を実施した。その結果、学生の翻訳作業の効率性と一貫性が大幅に向上したことが観察された。また、アンケート調査の結果により、学生の大半がCATツールの導入を肯定的に評価した。一方で、学習カーブの急さや過度の技術依存への懸念など、改善の余地も指摘された。本研究は翻訳教育におけるCATツールの効果的な活用方法を示す一例と言える。

●ラウンドD 14:35-15:40 (発表件数 14 件)

D01(46).日本で就職する選択をした元技能実習生の技能実習における経験—SCATを用いた語りの分析

古田梨乃 (新潟大学)

技能実習修了後に日本で就職する選択をしたベトナム人元技能実習生にインタビューを行った。インタビューの分析により、技能実習生にとって魅力的な職場となるためには、人権・法律が守られた健全な労働環境であることに加え、日本人社員が良好な人間関係を築けるよう積極的に働きかけたり、能力を正当に評価し、それに合う仕事を与え、働くことに自己成長を感じられるような職場を目指していくことが望まれることがわかった。また、技能実習中、仕事外では地域の日本語教室の日本人ボランティアや他の外国人住民と良好な関係を構築していたことから、日本語学習や生活のモチベーションのために地域の日本語教室が果たす役割も大きいことがわかった。

D02(47).大学の日本語教師養成課程における地域と連携した授業のデザインと課題 —日本語教師養成課程担当教員へのインタビューから—

澤邊裕子 (東北大学) ・ 中川祐治 (大正大学) ・ 早矢仕智子 (宮城学院女子大学) ・ 杉本香 (大阪大谷大学) ・ 西村美保 (清泉女子大学)

本研究では、大学の日本語教師養成課程において地域と連携した授業をデザインし、実施した教員5名(東北地方・関東地方・東海地方・関西地方)へのインタビューを通し、授業デザインの背景と課題について分析した。オープンコーディングおよび焦点的コーディングの結果、抽出されたカテゴリー「授業科目の位置づけと枠組み」「授業のデザインと工夫」「地域との連携を考えた経緯」「他の研修や実習との違い」「現在抱えている困難点」「今後の課題として認識している点」について報告する。教員の語りからは、導入の経緯、事前・事後指導、フィードバック内容、位置づけなどの面において、連携先への配慮や人材育成への強い思いがうかがわれた。

D03(48).高等学校の学校設定科目としての「日本語」のコースデザイン —学習指導要領の改訂に対するA高等学校での対応に注目して—

三好大 (帝京科学大学)

本稿では、高等学校における学校設定科目としての「日本語」のコースデザインに求められる視点について明らかにする。2022年度改訂版高等学校学習指導要領が施行された。そして、教科学習と学校目標との関連の明確化や新たな評価方法の導入により、求められる日本語能力も変化している。そこで、筆者が勤務するA高校における教育内容の再構築と評価の改善についての実践例を示した。これらの考察から、日本語科目には日本語習得と学校の教育目標達成という2側面があること、新たな評価方法には学習過程の可視化と到達度の適切な把握によって対応可能であることを示した。以上の視点を生かして、授業を行うには具体的な問題解決場面の設定や内容重視のアプローチに基づくコースデザインが有用であると考えられる。

D04(49).日本語学習者の依頼メールの開始部と終了部について —縦断的データから見えたもの—

東会娟（帝京大学）

本研究は縦断的データを用いて、日本語学習期間が長くなるにつれ、学習者の依頼メールの書き方にどのような変化が起きるのか、またそこに母語の影響があるのかを明らかにすることを目的とする。中国語を母語とする中上級日本語学習者を対象に、メールの開始部と終了部に注目して分析した結果、日本語学習期間が長くなるにつれ、メールの書き方の習得が進んでいるが、依然として語用論的転移や誤用が見られることがわかった。本研究の結果から、日本語教育においてメールに使用される定型表現について明示的に指導することの必要性が示唆された。

D05(50).日本語のビジネスメールにおける「配慮」とはどのようなものか —ビジネス書の解説をもとに—

潘静（東京外国語大学大学院生）

本研究は、ビジネスメールにおける「配慮」とはどのようなものかを明らかにするために、5冊のビジネス書の解説を取り上げ、以下のような分析を行なった。まず、メール作成の心得や留意点などに関する記述から、検索機能を使って、「相手」「読み手」「受信者」という検索語を含む記述を抽出し、これらの語と共起する言葉を特定した。そして、共起する言葉を分類して、「配慮」のカテゴリーを特定した。また、共起する言葉がそれぞれどのような項目を記述する際に用いられているかを特定した。その結果、ビジネスメールを作成する際、「相手の気持ちを考える」を最も重視しているとわかった。この配慮は「メールのマナー・常識」「言語知識」「件名の書き方」などの項目に対応していることも明らかになった。

D06(51).大学における翻訳授業の指導 —コーパスツールを応用した試み—

ファム ティ タイン タオ（ダナン大学外国語大学）

母語から非母語への翻訳は、非母語から母語への翻訳に比べ、難度が高い。日越翻訳においても、ベトナム語母語日本語学習者による越文の和訳は、和文の越訳より難しい。本研究では、語学教育としての翻訳授業を通して、コーパスツールを用いたことでベトナム語と日本語における語彙の相違を意識させ、転換する際に自然な語彙の使い方を選択できるようにすることを目的とする。結果として、コーパスの活用で越文中の語彙に対応する日本語語彙やその語彙と共起する表現を捉えることができ、学習者の語彙力を超えた、日本語母語話者によく用いられる語彙の検索も観察できた。また、検索中、多くの例文を対照比較することによって、規則性を見つけ、より日本語母語話者らしい日本語文を訳出することを期待している。

D07(52).中国の大学の日本語専攻学習者を対象とした通訳リスニング訓練

温麗軍（北京郵電大学）

本稿は北京郵電大学日本語科で実施した通訳リスニング訓練に関する実践報告である。実践は日本語力の不十分な学習者を対象とした通訳授業において、効果的な通訳リスニングを行うことを目的とする。通訳におけるリスニングは聞き取り、理解、記憶が重なった作業であるため、実践において、情報の要旨をつかむ訓練に「情報構造分析」と「リテンション」を、情報の細部を聞き取る訓練に「シャドーイング」を導入して、情報内容の理解と通訳に必要な多重タスク処理能力の育成を図った。同時に、効果的なリスニング訓練が可能になるためには、語学力の不足している学習者に配慮して、教材の内容と難易度を学習者のレベルに合わせて、みんながついていけるような訓練の進め方をデザインした。学生の反応からすれば、実践は所期の目的を達成したといえる。

D08(53).「年齢=数」への疑い—日本語教育への応用を目指して—

吉井雄樹（関西学院大学大学院生）

本稿は、「年齢=数」という幻想を問い直すことで、日本語教育における自己認識としての年齢について論じるものである。そのために、本稿では「言語記号の恣意性」と「記号の解釈項」を鍵概念とし、わたしたちが「年齢」について語るときに作られるものについて考察した。わたしたちが恣意的に切り取り、それについて語る「年齢」は生物学的な年齢と必ずしも一致するものではないこと、そして「年齢」にある価値が付与されることでわたしたちの年齢の捉え方にも影響することを論じた。本稿で論じた「年齢」の視点は今後の日本語教育を検討するうえで重要だといえる。

D09(54).オンデマンド型日本語準備講座の意義 —日本語ゼロビギナーへのインタビューをもとに—

工藤嘉名子・沖本与子（東京外国語大学）

本稿では、まず、2023年春に開講したオンデマンド型日本語準備講座の概要について報告する。次に、渡日前に日本語ゼロビギナーとして準備講座に参加し、日本国内の大学の学部に進学した日本語学習者3名へのインタビューをもとに、準備講座の意義と課題について考察する。準備講座参加前・参加中、来日後と時系列に聞き取りを行った結果、高い学習動機を持って講座に参加し、スクーリングにも積極的に取り組んだことにより、日本語の運用に自信が持てたということがわかった。ゼロビギナーの日本語学習者にとって、準備講座は、来日後の生活の変化を乗り越え、日本語の授業にスムーズに参加するうえで、必要かつ有用であることが確認された。

D10(55).メール文に見られる読み手配慮表現の誤用の傾向 —作文支援システム『さくらだより』の基礎データより—

金蘭美（横浜国立大学）・金庭久美子（目白大学）

本研究では、メール作成支援システム『さくらだより』の開発の際の基礎データをもとに、日本語学習者のメール文における読み手配慮表現の誤用の傾向を調べた。その結果、A 敬語の誤り、B 緩和表現の不使用、C 不適切なあいさつ、D 場面や対象に合わない表現、E 日本のマナーに合わない振る舞いの5つに分類することができた。A 敬語の誤りの場合は、日本語が未熟であると思われることがあっても人格的に問題があるとは思われない。しかし、B や E の誤りの場合、人格的な問題として捉えられる恐れがある。したがって、正しい表現を示しつつ、なぜそのような表現がよくないかについてもフィードバックで示す必要があることを述べた。

D11(56).日本語作文教育における ChatGPT 添削の活用 —中国人日本語学習者を対象に—

夏逸慧（広州工商学院）

自然言語処理技術の進展に伴い、AI 添削ツールが日本語作文教育における有望な支援手段として注目されている（水本など 2013, p.421）。そこで、本研究では AI 添削ツールとして ChatGPT を活用し、その有効性と限界を明らかにすることを目的とする。その結果、ChatGPT は、初級、中級、上級などの異なる日本語レベルに応じた添削能力を持ち、プロンプトの設定方法により、学生の作文能力向上をサポートすることができることを明らかにした。しかし、ChatGPT には編集能力に限界があるため、より専門的な知識や表現に

関するフィードバックを得るためには、日本語母語話者や中国人日本語教師による添削も併用することが重要であると考えられる。

D12(57).外国人児童向け教科学習用読み物の作成

二口和紀子（開智国際大学）・佐々木良造（静岡大学）・吹原豊（福岡女子大学）・助川泰彦（東京国際大学）

本研究では、外国人児童の教科学習言語能力及び読む力の育成を目的として、理科と社会の教科学習用読み物を作成し、読み物の内容、作成の方針と手順を報告した。試行版の読み物には各教科に関する語彙が含まれており、その特徴は右記のとおりである。1) イラストや写真などの視覚的情報が多用されている、2) 学校や生活圏など身近な場面が用いられている、3) 外国の事物と比較されている、4) 1 ページの文字数が少ない。今後は、読み物の活用方法を検討するほか、理科・社会・生活科の各教科に関連する語彙と学習内容の理解を促す読み物の作成を進める。

D13(58).教材におけるアスペクト形式テイルの導入の問題点と解決法 ―日本語とウクライナ語のアスペクト表現の対応関係の視点から―

ネケロワ マリナ（筑波大学大学院生）

本研究は、日本語とウクライナ語のアスペクトの対照を通じて、ウクライナ人学習者を対象としたこれまでのテイルの指導を考慮し、今後の改善について提案することを目的とする。まず、ウクライナ語に訳された日本語の小説における日本語のアスペクト形式テイルの5つの用法が対応するウクライナ語の表現をまとめた後、「結果の状態」の用法を中心に、ウクライナ語の様々な形式との対応関係を明らかにする。次に、両言語のアスペクトの対応関係の調査結果をもとに、日本語教材におけるテイルの導入を分析し、テイルの「結果の状態」の指導の問題点およびその解決法について論じる。

D14(59).「学校文法」という新たな文法体系を発見し、既習の文法体系を相対化する ―選択科目「日本語の文法」での試み―

萩原幸司（城西国際大学）

本発表は、日本語教員養成課程及び国語の教職課程の単位認定科目である学部選択科目「日本語の文法」に於いて、発表者がどのような教育実践を展開したか報告するものである。当該科目は特に第二言語として日本語を学ぶ学生を対象とはしていないが、そのような学生を排除しているわけではない。主に上記2課程の学生を対象としているが、日本語文法をより深く理解しようとする留学生も多く受講する。そこで発表者は、学校に於ける文法教育のあり方を批判的に見直すカリキュラムを開発し、留学生達には、「学校文法」という新しい文法体系を発見してもらうことを意図したのである。

【会費納入のお願い】

JLEMでは4月から翌年3月までを会計年度としております。2023年度会費(3,000円)未納の方は早急に納入いただきますようお願いいたします。2年分未納の場合は会員資格を失います。

なお、①ご登録の会員名と異なる名義で振り込まれる場合、②振り込んだ方の名前が外国語で表記される場合には、jlem-ml#jlem-sg.org(#は@です)までe-mailにてお知らせください。②では、特に中国の方がカタカナ名で振り込んでも、ゆうちょ銀行のシステム上振り込み名がピンインで表記されることが多いため、ご登録の会員名(漢字とカタカナのみ)を検索して確認するのに時間がかかっています。ご協力をお願いします。

その他ご不明な点も、上記アドレス宛にお問い合わせください。

【振込先】 (1) 郵便局の「電信振込」で払い込む場合

記号：10140

番号：69076511

加入者名：日本語教育方法研究会

振込者名：(氏名だけでかまいません)

(2) 銀行から振り込む場合

銀行名：ゆうちょ銀行

金融機関コード：9900

店番：018

預金種目：普通

店名：〇一八 店 (ゼロイチハチ店)

口座番号：6907651

加入者名：ニホンゴキョウイクホウケンキョウカイ

振込者名：(氏名だけでかまいません)